

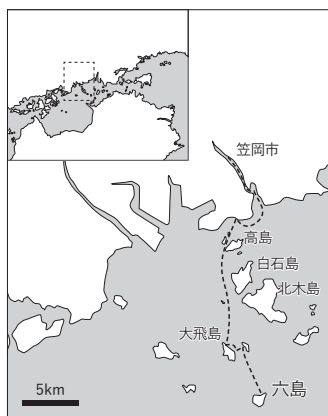
地域に「おこされた」若者が麦酒を醸す

井関 竜平

価格重視の仕事への戸惑い

現在三八歳になる僕たちの世代は、「受験戦争」を勝ち抜き、高い学歴を身につけて、公務員かホワイトカラーのサラリーマンとしてきっちりお給料をもらえる——そんな将来が是とされる「学歴・安定志向の社会」の中で育った。しかし、僕はそのような社会に疑問を感じながらも、大学卒業後は大阪で食品商社の営業マンとして就職。親も安心し、得られた社会的安定感からか、結婚もすんなりとできた。すっかり給料をもらいながら、日々の仕事に奮闘していた。

当時は、メーカーから商品を仕入れてスーパーなど食料品を扱うお得意様に紹介したり、販促企画を提案することで売



六島（むしま）

笠岡港の南、約22kmにある笠岡諸島最南端の島。面積1.02km²、周囲4.6km、人口47人(2022年11月現在)。南側には潮流の速い瀬戸内海の重要航路があり、安全を守るために岡山県で最初の灯台が設置された。漁業が主産業。島のあちこちにスイセンが自生する。

り上げを得る、という業務内容。アイデアや提案力はもちろん必要だが、最も重視されていたのは価格だった。大量の販促企画を組み、メーカーからできるだけ低価格を提示しても

らう手法に重きを置いていた。このため、大きな店舗はほとんどん販促を行ない、大量に仕入れることで、集客力の高い店舗となり、反対に仕入れの少ない小規模なスーパーはほとんど弱体化していった。小さいながらも地域に溶け込んでいた食料品店が価格競争に飲み込まれ、日を追うごとに弱り、潰れていく光景を見るのは辛いものがあつた。入社当初から、そんな弱肉強食のスタイルは自分には合わないかもしれないと感じていた。

祖母の住む島で感じた人の温かみ

人生の方向性を見失いかけていた二四歳のとき、ふと祖母の住む岡山最南端の島・六島へ旅に出た。大阪から車で三時間三〇分、笠岡の港に着くと潮風の香りが旅情をかきたててくれた。

当時は約五〇人乗りの客船で、六島までは一時間。島の港に着いて四〇〇メートル歩けば祖母の家である。港から祖母の家へ歩みを進めている途中、波止場で一人の男性と出くわした。八〇歳くらいだったと思う。島では、すれ違う人とは誰であろうと挨拶をするという習慣があるので、とりあえず声をかけると「どこの子や!？」と勢いよく聞かれた。面食らいながらも「春江の孫の竜平です」と答えると「おお、あそ



ドラム缶を囲んで酒を酌み交わす通称「ドラム缶会議(移住当時のようす)」。

この孫か」と会話が始まり、三〇分ほど祖母や六島の話を聞かせてもらった。

ふたたび歩き始めると、今度は波止場に置かれているドラム缶で薪を燃やしながら酒を飲む数名の島人と出くわした。ここでもやはり「どこの子や!？」と聞かれ、先ほどと同様に

答えると「おお、そうか、よう帰ってきたな! おかえり」と、キンキンに冷えた缶ビールを手渡された。じつは、この波止場には家庭用冷蔵庫が雨ざらしで置かれており、中にはよく冷えたビールが満載されている。外で家族以外の人間から「おかえり」と声をかけてもらい、海を背に酒を酌み交わす。一〇〇円程度の安い発泡酒だったが、衝撃的に美味しかったことが今でも忘れられない。

当時、僕はドライな都会では感じられない人の温かみのようなものを求めている。それが自分の田舎にあったことに心

が震え、喜びを感じた。そんなことを考えながら酒を交わしている。日は陰り、祖母の家に着いたときには歩き始めてから五時間も経っていた(笑)。

島の可能性を信じて脱サラ

それからの僕は連休になると六島へ行くようになり、脱サラと移住を模索し始めた。島に帰るたびに、島外のさまざまな立場の人たちが、島のコミュニティに関わりようとしていることに気づいていたが、移住までの一步を踏み出した人はいなかった。そして、そういった方々が会合で口にする「地域



六島で開催したビール祭り「六島オクトーバーフェスト2019」。1日で約300人の参加者がクラフトビールと地元の食を楽しんだ。



かつて島に麦畑があったという話を聞き、仲間とともに復活させた。

課題」「地域を活性化しよう」といった言葉に、疑問を感じることもあった。六島が注目され、いろいろな人が関わることは喜ばしかったが、どうも腑に落ちない。過疎高齢化が進んでいるとはいえ、地域課題は都会にも同様にあるものだし、ただ課題に近づく姿勢だけでは何も始まらない気がしていた。

僕自身の心が動くのは「地域課題」ではなく「島の生活が持つ可能性」に対してである。実際に島で生活しながら、熱量をもって活動することでしか生まれない価値があるという確信に似たものもあった。いま振り返れば、僕はそれを確認するために移住したように思える。そしてその結果は、今のところ「正解」である。

麦酒を通して島の価値を次世代へ

僕は二〇一六年に地域おこし協力隊として六島に移住した。その後、地域の方々から知恵を授かり、かつて島にあったという麦畑や当時の生活を知ること、「麦畑の復活」を構想し、実現させた。そして現在、「六島浜醸造所」[*]を開業し、麦酒を醸す生活を送っている。

僕の人生の物語と麦酒をランドマークに、島外から人が訪れ、六島の生活に魅了される。そんな旅人が一人また一人と増えていき、島の応援団が大きくなっていく――。外部から

受け入れ側からの言葉

市役所職員と協力隊の関係を越えて

笠岡市には「地域担当職員制度」という、本来業務とは別に担当地域を決めて日常的に地域振興に関わる仕組みがあります。2012年の制度導入以来、私は六島を担当してきました。六島は笠岡諸島最南端の一番小さな島で、当時の人口は約100人ほどでした。しかし、島内にはその1割にあたる10人の子どもがいて、可能性を感じる島でもありました。

住民らでつくる「六島まちづくり協議会」の運営を手伝う中で、私は「他力本願の島づくり」というテーマを掲げました。小さい島で何か新しく取り組もうと思っても、住民の負担が増すばかりです。そこで、知り合いのコーディネーターに依頼し、六島でのインターンシップ事業を導入しました。若者が島に滞在し住民とともに島づくりを考える事業で、これまで12期・約30名のインターン生を受け入れてきています。

井関くんは、おばあさんが住む六島へ帰ってくるたびにインターン生らと熱く島の将来を語っていました。また、彼には2人のお子さんがおり、移住が島の学校の存続にもつながるとあって、地域おこし協力隊として受け入れることになりました。赴任当初は、島の大運動会や島小屋(ゲストハウス)のオープンなど大きな事業が目白押しで、メディアも彼の活動をクローズアップして報道しました。六島＝井関くんというイメージができたことで、これまで頑張っており組んできたメンバーとの間に軋轢が生じたこともあったようです。

私は、島づくりの一翼を担って欲しいとの一念でいろいろとアドバイスしましたが、彼自身いろいろと悩み抜き、最終的に「六島ビール」はどうかと相談してきました。当初、私は、なぜ島でビール工場？と彼の提案を否定的に聞いていました。しかし、いろいろな人脈を活かし、技術の習得を目指して東奔西走する彼の姿を目の当たりにし、私の小さいものさしでは測りきれない存在であると気づきました。井関くんの本質を知るにつれて、素直に彼の行動を受け入れて全面協力しようと思ったのです。今は、彼が六島ビールに集中できるように、私は市職員の立場ながらも、六島をサポートする地域おこし協力隊の心境で島づくり活動を続けています。現在、新たな協力隊の募集を行なっています。40人足らずの島に「ビール工場」「カフェ&ゲストハウス」があり、世代を超えて取り組みを応援する素地は揃っています。一緒に楽しいこと島せんか？

(笠岡市吉田文化会館館長 守屋 基範)

見ると、僕の取り組みは「地域おこしをしている」と評されることが多いのだが、実際には対極で、人生に迷った都会の若者が「地域によっておこされ」、人生の目標を持つまでに至ったのである。凡人の僕がサラリーマンを辞め、小規模ながらも醸造所を立ち上げて活動が継続できているのは、地域の先輩方をはじめ、家族やたくさんの人々が好奇心と大きな熱量をもって関わってくれているからだ。

実際に僕が住んでいた都会で、六島と同じ現象がおこせたかという、限りなく難しかっただろう。だから、僕のような者をここまで成長させてくれた六島は、可能性の宝庫だと確信をもって言える。僕は、自分と同じように「六島におこされる」若者を増やし、たとえ地域の先輩や僕自身がいなくなった時でも、その価値が継承されていくように、これから麦酒を仕込み、働きかけていきたい。

※六島浜醸造所



井関 竜平 (いせき りゅうへい)

1984年、大阪府藤井寺市生まれ。2016年に地域おこし協力隊として六島に赴任。島で麦畑を復活させる活動に取り組む。2019年、六島浜醸造所を開設。